

現場発
ミカンの農薬と
ホルモン剤の
使い方 最終回

腐敗防止剤にアビオンEの 加用で効果アップ

坂田寛樹

貯蔵産地に 腐敗果対策は必須



緑かび病や青かび病で腐敗した果実

ミカンの貯蔵中に少なからず出でしまうのが腐敗果です。果皮障害や浮き皮、収穫中のハサミ傷が原因で、緑かび、青かび、灰色かびなどの菌が広がり腐敗は起ります。

前回紹介したように近年は温暖化の影響で浮き皮果が増え、腐敗果も増加しています。とくに2015、16年は非常に多く発生しました。温暖化で酸含量が下がっていることも

貯蔵性の悪化につながり、貯蔵ミカン産地の和歌山県下津町では死活問

題になっています。

対策は浮き皮を防ぐこと、収穫や運搬時に果実を傷つけないようにすることに加え、収穫前の薬剤散布がありまます。下津では薬剤散布の際に、固着剤のアビオンEを加用することでの効果を高めています。今回紹介するのはこの技術についてです。

お互いを補い合う 2剤を混用

腐敗防止剤として使う薬剤は、ベフランM、ベンレートI、トップジンの三つです。下津ではこのうち2剤を混用するように指導しています。それは、それぞれに持っている特性を補い合うためと、薬剤抵抗性のついた菌の広がりを安定して抑えるためです。

ベフランは日本では耐性の見つかっていない薬剤です。緑かび、水腐れ(白かび)に強いいっぽう、すでに傷がついている果実では菌の広がりを防

アビオンEで
効果アップ!



年内に出荷する ミカン	ベンレート水和剤	4000倍
	ベフラン液剤25	2000倍
	アビオンE	1000倍
貯蔵ミカン	トップジンM水和剤	2000倍
	ベフラン液剤25	2000倍
	アビオンE	500倍

腐敗防止剤にも 耐雨性が必要

腐敗防止のための薬剤も、散布後に一定の雨が降れば流れてしまいます。積算雨量に合わせて薬剤を何回か散布するのが効果的ですが、一度収穫

ベンレートとトップジンはどちらも軸腐病には強い性質を持つています。二つとも、傷口を修復する効果があるMBC(メチルベンゾイミタゾールカリバメート)という成分になります。ただ、二つには違いもあり、ベンレートは水に溶けた瞬間にMBCになり速効性がありますが、トップジンはミカンの樹に吸収されてからやがてMBCになるので少し時間がかかります。

ベフランにベンレートかトップジンを混用することで、それぞれの特性を補い合ってできるだけ幅広く腐敗を抑えるようにしています(上の表)。

「藏出しみかん」の産地・下津町では、急斜面のミカン畠のすぐそばに貯蔵倉庫がある(編)

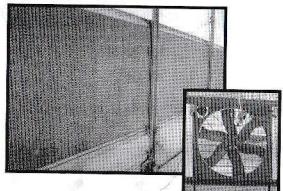


温室・畜舎 気化冷却システム なら

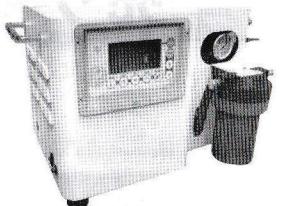


株式会社 イーエス・ウォーターネット

パッド&ファン



細霧冷房



高圧ポンプ細霧冷房やパッド&
ファンなどご要望に応じて最適な
システムを提案します!
お気軽にお問い合わせ下さい。

ES 株式会社 イーエス・ウォーターネット
本社/TEL:042(355)7702
<http://www.es-waternet.co.jp/>

アビオンEを加えることで得られるのは、付着量の増加による耐雨性の向上です。さらに、高濃度で処理することで、果実表面にワックス層ができ、ハサミ傷などで腐敗する果実の「腐の連鎖」を断ち切ることができます。一つひとつのがれも隣にうつりにくいいのではないかと考へています。処理費用は高くつきますが、費用対効果や出荷時の労力を考へても有効な方法です。

を得ました。

アビオンEでしつかり付着

アビオンE1000倍は500倍に比べて効果は落ちますが、年内出荷するミカンにはできるだけ経費を抑えられる1000倍をおすすめしています。さらに処理になるべく費用をかけない方法として、管内の前山善秀さんでは腐敗防止剤にアビオンEではなく、マシン油1000倍を加用しています。その実践を踏まえて、昨年は農協でも農薬メーカーと一緒に試験を実施。マシン油は着色がやや悪くなってしまいますが、腐敗防止剤の効果を高める結果が出ました。



農薬メーカーと協力して行なった試験の様子。
アビオンEを加用したのが一番左のコンテナ。
腐敗果が一番少ない

が始まればなかなかそうはいきません。そのため、雨に流されないようにしつかりと薬剤を付着させることが大切になってしまいます。

そこで、2012年にトップジンとペフランにアビオンE500倍を加える区、1000倍を加える区、無加用区（腐敗防止剤のみ区）に分けて薬剤の効果を試験しました。散布後に貯蔵してどれだけ腐敗果が出るのかを試すのです。貯蔵期間中はビニール袋で果実を包み、腐敗を助長させました。この試験で、アビオンE500倍を加えた区は圧倒的に腐敗果が少ないという結果が出ました。また、腐敗防止剤のみの区では全体が灰色になって腐っていたのに対し、アビオンE加用区は腐れがまわりに転移していない傾向がありました。

この結果を受けてアビオンEの加用を農家にすすめていったところ、腐敗が多かった年にも、農家から高い評価がありました。

この結果を受けてアビオンEの加用を農家にすすめていたところ、腐敗が多かった年にも、農家から高い評価

温暖化の進行は貯蔵ミカン产地の下津にとつて深刻な問題で、昔のように貯蔵に適した産地だ」とはとても言えなくなってきた。とはいっても、下津町のミカン畑は急傾斜地が多く、高齢化もすすんでいます。マルチ敷設をして他産地の年内ミカンと競合していくことが賢明です。日本農業遺産に認定された「蔵出しミカン」のブランドを維持していくように、これからも農家と一緒に技術を高めていきたいと思っています。